

**活動の成否を左右する  
“雑用係”の役割**

国際緊急援助隊（JDR）の救助チームや医療チームが災害現場でスムーズに活動できるように、裏方として奔走する人々がいる。救助活動、医療活動以外のあらゆる業務を一手に引き受ける「業務調整員」だ。

「言い換えれば、『国際的雑用係』といったところでしょ（笑）。この仕事について冗談交じりに話すJDR事務局・大友仁さんは、業務調整員のエキスパートとして、これまで6カ国で12回にわたり被災地で活動してきた。

業務調整員の任務は、隊員が災害現場で最大限に力を発揮できるように、その環境を整えること。派遣が決まると真っ先に現地に入り、活動サイトの選定から、隊員・機材の輸送手段や現地通訳、運転手の確保、隊員の宿泊場所と飲料水・食料の手配までを行う。また、チームの活動が本格的に始まってからも、メディア対応や衛星電話を使った日本との連絡など、状況に応じてさまざまな業務をこなす。そんな彼らの果たす役割は、「活動全体の成否を左右する」とも言われるほど重要なものだ。かつてJICAのボランティア調整員として、フィリピンで3年間、インドネシアで4年間、青年海外協



普段は、JDR医療チームの研修の指導・運営などのため、忙しく国内を走り回っている



2005年の پاکستان地震のとき、片腕となって動いてくれた現地通訳の一人と。彼らもJDRの大切なメンバーだ

**被災者からの「ありがとう」を力に**  
業務調整員の最も重要な任務の一つが、被災地到着後すぐに取り掛かる活動サイトの選定だ。現地の災害対策本部などと連絡を取りつつ、自らの足で被災地を回り、最適な場所を探す。

「例えば医療チームであれば、患者が来やすいか、診療テントを設置する十分なスペースがあるか、重傷者を運ぶ病院は近くにあるか、といった点を考慮して、総合的に判断します」

力隊員らの活動支援や安全管理に努めてきた大友さん。インドネシアでは、政情や治安の悪化に伴うボランティアの一時退去や、関係者が巻き込まれた事故・自然災害への対応など、図らずも数々の困難なオペレーションに携わった。そんな経験が買われ、「現場でさまざまな調整業務を行える人材」として声が掛かり、2000年からJDR事務局に勤務している。

06年のインドネシア・ジャワ島中部地震のときには、地域最大の病院の前の道路に診療テントを設置。JDRの医療機材では対応できない重症患者はその病院に搬送し、軽症者の診療はJDRが担当するなど、それぞれの役割を明確にすることで効果的な連携が生まれた。

また、大友さんが被災地で特に気を配るのが隊員の健康管理だ。「隊員は、使命感から気付かないうちに無理をしてしまう」。合間を見ては、水分を取っているか、定期的に休憩しているかなど、声を掛けて回る。さらに現地では、持参した非常用の食事が続き、何日もシャワーすら

浴びられないこともある。そのため、時には市場で安全な野菜を買って温かいスープを作ったり、シャワーが使える郊外のホテルを手配して交代で休めるようにしたりするなど、より良い生活環境づくりにも取り組む。「士気を保ち、明日の活動への活力を養ってもらおう。それも私の大切な任務です」。

**おおもと・ひとし**  
1963年秋田県出身。茨城大学農学部畜産学科卒業。86～89年、青年海外協力隊・畜産技術指導隊員としてフィリピンで活動。92年よりフィリピン、インドネシアでJICAボランティア調整員を務め、2000年より国際緊急援助隊事務局勤務。途中、内閣府国際平和協力本部事務局を経て、05年10月より現職。（社）青年海外協力協会所属。

ほかの業務調整員と相談しながら、状況に応じて的確な判断を下していく。その豊富な知識と経験から、周囲は絶大な信頼を置いている



JICA国際緊急援助隊事務局 オペレーションチーム  
Otomo Hitoshi

**大友 仁さん**



ジャワ島中部地震の被災地にて。大変な被害に遭ったにもかかわらず、JDRの活動に感謝の心を伝えてくれる被災者と接し、「彼らのためにもさらに専門性を高め、緊急援助の質を高めていきたいと思った」と大友さん

**「JDRの“雑用係”として専門性を高めたい」**

国際緊急援助隊（JDR）の活動がスムーズに進むよう、“縁の下の力持ち”として奮闘する「業務調整員」。これまで12回に上り被災地へ派遣された経験があり、災害の怖さ、そして笑顔を取り戻す人々の姿を目にしてきた大友仁さんは、この道のエキスパートだ。

第9回

**ゲンバの風**



**JDR 業務調整員として派遣された国**

